

育児ソーシャル・サポートが母親の 自己効力感と育児幸福感に及ぼす影響

16S13044 福間好美

こども心理学部 通信教育課程 指導教員 藤後悦子教授

キーワード：育児ソーシャル・サポート 自己効力感 育児幸福感

目的

現代の母親は、女性の生き方の多様化に伴い「自分で子育てしたい」と同時に「自分の生き方も大切にしたい」と望む母親が増加している(原口・松浦・矢倉・佐々木・笠置, 2005)。またそうした葛藤の中で、理想のありたい自分と現実の生活に大きなギャップを感じながらも近づけていけない現状から、育児不安が喚起されている(原口ら, 2005)。

ソーシャル・サポートは育児に対する対処行動の積極性を高めるが、直接育児ストレスを軽減するより、自己効力感を介してストレス反応を軽減する(渡辺・石井, 2009)。また、ソーシャル・サポートを認識している母親は育児に自信があることが多く、子育てして自信につながる意識の変化の実感や、子育てがうまくできた実感を持つ(清水, 2013)。

育児期をより楽しく過ごすには、母親の自己効力感を高める支援と夫や周囲の人からのサポートが重要であり(西出・江守, 2011)、育児幸福感を認識しながら育児をするということは育児をより有意義な体験とし、母親自身の自己価値を高めることである。本研究では、育児ソーシャル・サポートが母親の自己効力感と、育児幸福感に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

方法

2019年7月から11月に、茨城県K市3~4か月児健康診査の対象となった児の母親220人を対象とし、無記名自記式質問紙によって行った。回答後その場で回収し、分析に必要な回答を得られた194人(初産婦76人、経産婦118人)を分析対象とした(有効回答率88.1%)。調査項目は、基本的な属性、「子育ての悩みの相談相手」、「育児情報の情報源」、「育児ソーシャル・サポートの認識」、「育児に対する効力期待」、「育児中に感じる多面的な幸福感」である。尺度は3つ使用し、育児ソーシャル・サポート尺度(手島・原口, 2003)は3因子17項目4件法、育児に対する自己効力感尺度(金岡, 2011)は1因子13項目5件法、育児幸福感尺度(清水・関水・遠藤, 2010)は3因子13項目5件法で使用した。

結果

母親の平均年齢は30.79歳(17~43歳, $SD = 4.99$)、子どもの数の平均は1.94人($SD = 1.00$)、就業形態は専業主婦53.1%、就業している母親46.9%、世帯構成は核家族77.8%、拡大家族22.2%であった。子育ての悩みの相談相手は9割の母親が「夫」をあげ、「自分の父母」、「ママ友」と次いだ。また7割以上の母親が3人以上の相談相手がいると回答した。育児情報の情報源は、「インターネット」「友人」「家族」をほぼ7割があげた。情報源数は6割以上の母親が情報源を3つ以上持っていた。初産婦別に各下位尺度を検討した結果、「居場所づくり」は経産婦が初産婦より有意に高い傾向であり、「夫への感謝」は初産婦が経産婦より有意に高い傾向であった。また、初産婦は育児ソーシャル・サポートと「自己効力感」、「育児の喜び」、また「夫への感謝」と「精神的サポート」に正の相関を示した。経産婦は、育児ソーシャル・サポートと「自己効力感」、育児幸福感に正の相関を示した。さらに、初産婦では育児ソーシャル・サポート

と「自己効力感」に正の相関が見られ、経産婦では「育児ヘルプ」、「居場所づくり」と「自己効力感」、「精神的サポート」と「育児の喜び」、「夫への感謝」に正の相関が見られ、「育児ヘルプ」と「夫への感謝」に負の相関が見られた。

考察

仮説1「育児ソーシャル・サポートの存在は育児に対する自己効力感を高める。」は初産婦においてのみ支持された。9割の母親が夫を相談相手としてあげているが、経産婦にとって夫は「精神的なサポート」や「育児ヘルプ」となっており、「自分や夫の父母・きょうだい」、「ママ友」といった身近な相談相手で「精神的サポート」や「育児ヘルプ」を補おうとするため「居場所づくり」が経産婦に有意に高い傾向にあると考える。また、経産婦に「居場所づくり」と「自己効力感」、「精神的サポート」、「育児ヘルプ」に正の相関が示されたことで、「居場所づくり」に成功することが「精神的サポート」や「育児ヘルプ」となり、母親の自己効力感を高めることにつながると推測する。

仮説2「育児に対する自己効力感が高いほど育児幸福感を得やすい。」は経産婦においてのみ支持された。初産婦は産後の手厚い育児ソーシャル・サポートが徐々に受けられなくなっていく過程で「精神的サポート」「育児ヘルプ」に不足感を感じ、安心して育児できない状況が「子どもとの絆」を弱め、自己効力感を高めるまでに至らないと考える。しかし、経産婦では「子どもとの絆」と「育児の喜び」が正の相関を示していることから、育児経験を重ねることや育児ソーシャル・サポートの認知により「子どもとの絆」と「自己効力感」が高くなることや、その後の「居場所づくり」により他者からの確証を得ることで「自己効力感」が高められ、育児幸福感が得やすくなると推測する。今後の課題として、育児に対する否定的感情は子どもの年齢が上昇するに伴って強くなる(藤田・金岡, 2002)ことから、自己効力感や育児幸福感につながる育児ソーシャル・サポートについて、さらに縦断的な調査が必要であると考えられる。

文献

- 原口 由紀子・松浦 治代・矢倉 紀子・佐々木 くみ子・笠置 綱清 (2005). 母親の個人としての生き方志向と育児不安との関連 小児保健研究, 64 (2), 265 - 271.
- 金岡 緑 (2011). 育児に対する自己効力感尺度(Parenting Self-efficacy Scale — PSE 尺度) の開発とその信頼性・妥当性の検討 小児保健研究, 70 (1), 27 - 38.
- 柏木 恵子・若松 素子 (1994). 「親となる」ことによる人格発達 —— 生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5 (1), 72 - 83.
- 清水 嘉子・関水 しのぶ・遠藤 俊子 (2010). 母親の育児幸福感尺度の短縮版尺度開発 日本助産学会誌, 24 (2), 261 - 270.
- 手島 聖子・原口 雅浩 (2003). 乳幼児健康診査を通じた育児支援 育児ストレス尺度の開発 福岡県立大学看護学部紀要, 1 (1), 15 - 27.